

Newsletter

DEC. 1998

<http://www.from.co.jp/aack/>

チヨゴリザ初登頂四〇周年記念特集号

実行委員長 平井一正

一九九八年は、本会がカラコラムの処女峰チヨゴリザ（七六五四メートル）に初登頂してからちょうど四〇年目に当たる。当時のヒマラヤ遠征は、きびしい外貨状況、資金難、乏しい情報などで今では想像もつかないほど困難な状況で行われた。AACKとしては、アンナプルナ遠征の痛手からようやく立ち直ったところで、まさに背水の陣の遠征であったといえよう。それだけにチヨゴリザ登頂成功は、AACK創設以来の夢―ヒマラヤ初登頂―の成就であり、またマナスルに次ぐ日本人によるヒマラヤ初登頂として、関係者の喜びは大きかった。新聞、ラジオ、週刊誌、映画（当時テレビはなかった）などによって、若い世代に与えた影響も大きく、その後のヒマラヤブームの導火線になった。事実今年の夏、NHKラジオの定期番組「今日は何の日」でもチヨゴリザ初登頂がとりあげられていたなど（一九九八・八・四）、当時、社会的にも大きなインパクトを与えたことが伺える。

いま時代は変わり、処女峰に対する価値観も変わった。そこでいまチヨゴリザ登頂の意義をふりかえり、今後の海外登山のあり方を考えることは、今後の我々のヒマラヤに対する取り組みかたを考えた上で意義あることと思ひ、標記のような企画を考え、今年五月の総会で本会主催で行う承認を得た。最初にクリンチさん

に打診したのは九七年末であるので約一年間弱の準備期間をへて、一九九八年十一月八日午後一時半から記念講演会・記念パーティを京大会館で開催した。

東京から村木潤次郎JAC前会長はじめ、常務理事、学習院山岳会OBやその他関係者多数が来られ、さらにJAC関西および京都支部、同志社大学山岳会、神戸大学山岳会の各会員、その他当時お世話になった方々など、実に多数の方が参加された。約六〇名の本会会員を含み、参加者は講演会では約一四〇名、記念パーティでは約一二〇名におよび、会は大いに盛り上がった。

その詳細は次に記すが、本当にAACKらしい雰囲気の出た会であった。事実参加者からも、登山ではまだ西高東低の感をもった、刺激を受けた、AACKはやはり多士済々である、感動した、などの意見をよせられ、関係者として喜びにたえない。

最後にご多忙の中をわざわざ来日して記念講演を賜ったN・クリンチ元アメリカ山岳会会長、ご祝辞をいただいた三好都朗京都大学副学長、村木潤次郎前JAC会長、小倉茂暉JAC副会長、パネリストの方々、特に平林克敏、井上達男の各位、さらにこの企画にご高配、ご援助いただいた本会関係者各位、記念パーティに清酒をご寄贈いただいた松本保博、テープ起こしの労をとられた新井浩の各位、その他お手伝いいただいた会員諸兄弟に実行委員長として心より感謝する。

第一部 記念講演会

挨拶

AACK会長 上尾庄一郎

今から六七年前に、この京都大学学士山岳会AACKは今西錦司氏を中心とする仲間によって作られました。ヒマラヤの処女峰を登ると言う目的で発足しましたが、残念ながら戦争とかの社会情勢は実現を許さずということで終わりました。それが二六年後に、一九五八年にチヨゴリザの初登頂がなり、初めて最初の夢が適えられました。それ以後、それが切っ掛けとなり、AACKは各地において多くの初登頂に成功をしております。その記録は都度本になり、しかるべき雑誌に発表しております。同時に行った学術調査もしかるべきところで発表されていきます。しかし、我々は成功ばかりでなく、その間に何人かの仲間を失っております。その中で一番大きいのは梅里雪山の大量遭難でした。中国側、日本側、計一七名を失うという悲劇にも見舞われています。

とにかく四〇年前と今とでは、世の中は随分違う形になっておりまして、その当分の一番若かった隊員、大学院の学生が京都大学に職を得て、それが定年退職し、今は名誉教授になっていらっしやるように、時代の流れが有ります。この後のビデオで御覧になりますと、四〇年の経過、人の変わりが理解されるのであります。

このチヨゴリザ登頂については、桑原隊長（創立メンバーの一人）が、「チヨゴリザ登頂」という本をお書きになり、文芸春秋社からのベストセラーとなりました。同時に映画も封切りされました。そして世の中に影響を与えたわけでありました。本日、祝辞を頂戴する村木様のマナスルの影響程ではなかったかも知れませんが、チヨゴリザは京都大学のみならず日本の各界にも大きな影響を与えたものと思っております。

日本の中から見ればかりでなく、海外からの見方につきましても、お話があります。丁度チヨゴリザと同じ時、現地で登攀活動をおやりになって成功を取められたヒドンピークのアメリカ隊の隊長、クリンチさんのお話が楽しみです。

偶然ではありますが、全く同じ時期にカラコラムに入ったイタリア隊がありまして、ガツシャープルム四峰、GIVの登攀者ボナッティ氏（当時最も優秀と言われた）が、この九月に日本山岳会招待で来日され、大阪で講演会をやり、ついで京都にお越しになりました。京都では、四〇年前にバルトロ氷河上でお互い交歓した当時のメンバーが集まり、昔の思い出を語り合い、再会の感激的な場面がありました。ビデオでこの時の四〇年前の様子が出てくるかと思えます。

司会者が言われました通り、今後の大学を中心とする山の活動は、特にヒマラヤでの活動は大変難しい状態になっております。これら全てが、今日のディスカッションを通じて言及されることになるかと思えます。本日お越しの方々は、山のみならず実績においてもフィロソフィーにおきましても一流の人々ですので、参考になる御意見が聞かれるかと思えます。AACKの会員は、なにも京都大学の卒業生に限っているわけではありませんで、広く開かれているものであります。その意味で、パネル討論会では、会員であるなしに拘らず、どうか自由に発言して下さい結構です。出来るかぎり有意義なものにしたと思いますので、御協力のほどよろしくお

願います。

最後に本日の記念講演会は、その計画立案、実行に当たり殆どを司会の平井さんが一人でやってこられました。そんなわけで感謝の意を表したいと思えます。どうも有難うございました。

祝 辞

前日本山岳会会長・稲門山岳会

村木潤次郎氏

チヨゴリザ登頂四〇周年おめでとう御座います。

前会長というのですが、日本山岳会の代表としてということでしょうが、そうならば本来代表としてお願いすべきは、現会長の齋藤さんがなさるのがしかるべきかと思えます。しかし齋藤さんは残念ながらAACKの当事者の一人とすることで御遠慮なさったのであります。さらにはバルトロ関係の諸先輩が大勢おられますが、候補者の中には一九六三年の、チヨゴリザのお向かいにあるバルトロカンリへ東大隊を率いていった渡辺兵力さんがおられます。平井実行委員長の意中の人だったわけですが、御都合で来れない。仕様がなから前が代わりに出ると言うことになりました。有難みがないのですが、チヨゴリザの皆様とは年令がほぼ似通っていますし、特に東京でよく話し合った仲間の中核にあつた加藤泰安さん、チヨゴリザ隊の副隊長ですが、私は早稲田を出ていますがその影響よりもこの人からの影響がはるかに大きいと言っても良い。そんなわけでご祝辞を申しあげても多少は言い訳が立つたかと、そんな感じでありました。

実はいい加減なことを申したくないと思いましたが、桑原先生のご本、「加藤泰安の「山岳五四年度」の本、平井さんの力作「初登頂」を、チヨゴリザに係わることを一夜漬けて勉強してきました。その中で、やっぱり今更ながら自分の若いときを思い出

すことが沢山ございました。山登りに関することで「ヘルマン・プー、何するものぞ」との藤平さんの意気込み、平井さんの謹厳実直なチヨゴリザ登頂ぶりの様子など、いろんな関連文献を掻い撫でて読ましてもらいましたが、その中にAACKの底の深さがありありと有るのを感じました。例えば藤平さんが御苦労なさつて、チヨゴリザの第一回目の失敗を経て第二回はルートを変えて登られたこと、そんな中であつて周りのカベリピーク、コンダスピークをちゃんと登つておられる。余力がありました。しかもチヨゴリザ登山を終つてから、BCから引き上げる時に、そのまま帰らないで司会の平井さんと学習院の芳賀さんの二人はムズタークタワーのあるピアンジェ氷河に入り、ステステ峠に登り偵察に入つていらつしやる。加藤さんの報告に頂上からの鳥瞰した写真と共にシャックスの素晴らしい写真を見せていただき、大変底力のある隊と思えました。

もう一つ、最近これは参つたなあということが、一つ御座います。今年の五月ですが、松本で登山と高所にかかわる医学国際会議がありまして、これを主催されたのがチヨゴリザの中島先生ですが、あとから私に「AACK高所医学研究論文集」を贈つて下さつた。医学のことですから私が見ても判らないのですが、それを拝見していますと、その中に日本の登山界の戦前から今日に至るプロジェクトについて表があり、次のページにはAACKのヒマラヤ遠征の歴史が、三〇数年に亘つてのものが列挙されています。どうもこれも適わないと思つたのは、その中に一四座の初登攀があると書かれている。そして色々の地域での活躍が一目で分かるのであります。

一九五五年に木原先生の小麦の先祖を訪ねる大探検がありました。この時にヒンズークシユ・カラコラム支隊が出ていて、今西隊長が率いておられました。その中に確か中尾佐助さんも御一緒されましたが、この隊の一つの実績と余光によつて、AACKの活躍が為されていったのではないか。私の僻目ではありますが、そんな感じが致します。更に、

その過程を想像していくと、北は天山・コンロン山脈、西はヒンズークツシュ・カラコラム、さらにヒマラヤ山脈、東の方では横断山脈という大きなサークルがあります。北東はゴビ砂漠で抜けています。今西さんが西安研究所時代に、望み考えておられた一つの、鳥瞰図ではないかという感じが致します。古来インドの人達が宇宙観を現わすのに曼陀羅図を作ったと言われています。いま申し上げたひとつの山岳の枠を考えますと、確かにヨーロッパ・アジア大陸からアフリカ・インドあたり、全体を含めた中で、一際高く聳えるのが今の山のサークルである。今西さんを始め先輩達は、始めからイメージがあったのではないか。今西さんの曼陀羅ではないだろうか。曼陀羅があったのではないか。どうも話が飛躍するようですが、こういう曼陀羅を基にしての三〇数年、四〇年に亘るヒマラヤ遠征があったと、自ずから判るのであります。西はチヨゴリザから、サルトリカカンリ、東へ行ってヤルンカン、さらには梅里雪山と、ひとつの曼陀羅の終末が見えるようです。ただ東の方の曼陀羅は未だ閉じていなくて、一つの恨みがあるかも知れませんが、こういう風に考えていくと、四〇年・五〇年の歴史は今西曼陀羅で説き明かされるのではなからうかと、そんな感じを持っていきます。これは私の妄想であります。そう思ってみると、加藤泰安が戦時下に於いて北京からドイツ迄を繋げようとして苦労されたようですが、そんな妄想であります。

であろうかと思えますが、年寄りも同時に一緒に考えなくてはと思います。いささか自分の思い込みかも知れませんが、御理解しにくい面があったかもと存じます。

今西曼陀羅の最初の起点であるチヨゴリザ登頂四〇周年は、おめでたいのですが、これからどうするのかが大きな問題であります。大変失礼致しました。

記念講演

ヒドンピークとチヨゴリザ

元アメリカ山岳会会長・ヒドンピーク隊隊長
ニコラス・B・クリンチ氏

司会の平井先生、ありがとうございます。

私はここにお招きを受けて再び日本の良き友人たちにお会いできることを喜び、ヒマラヤにおける日本人のすばらしい業績に敬意を表する特権を与えられたことに、お礼を申しあげます。あなたがたの輝かしいチヨゴリザ遠征隊から受けることができたこと、カラコルムから帰ってきたポーターたちを採用することができたこと、隊員たちとの長期にわたる温かい友情、とりわけ私の家族に平安を取り戻せたことに、謝意を表したいと思います。

私はテキサス州ダラスの出身です。四〇年前アメリカには登山家は僅かしかいませんでした。実際、テキサス全州に登山家は私を含めて二人しかいなかったのですから、登山家は大衆の理解を超えたスポーツでした。辛抱強く責任感の強い私の両親にとってもそうでした。私の父は一七歳で家を出、フランス陸軍に入り、第一次大戦では救急自動車運転を、のちに一九二〇年代、三〇年代および第二次大戦では軍用機の操縦をした人ですから、私が山登りをす

ることに反対をする立場にはありませんでしたが、父も母も私がやっていった登山が人から尊敬を得ることが出来るものかどうか、たいへん気にかけていました。私の友人たちが、アンデスからの帰りに、髭ぼうぼう、泥だらけの服装で転がり込んでくるのがわが家の常でしたから、なおのことでした。

その後、チヨゴリザとヒドンピークの旅のあとで、桑原武夫教授がテキサスを訪れ、ダラスの私の家に泊まったことがあります。その時私は不在で先生をおもてなしできなかったのですが、先生は私の家に確かに幾つかの驚異を生み出しました。彼を知る誰もがわかるように、先生はこのほかに知的で、親切で、気前良く、丁寧で、魅力に富んだ紳士でした。私の両親は完全に先生に魅せられました。もし彼が登山家であるならば、登山家というものはきつとすばらしい人々であるに違いなく、登山はたいへんすばらしいスポーツであるに違いありません。このような品性を高める活動にこの私が私に現れるのを見たいものは喜び、似たような結果が私に現れるのを見たいものだと思いはじめたのです。桑原教授が代表的な登山家だと私は積極的に説明しませんでしたし、桑原教授が普通の登山家より遥かに高い水準にあったばかりでなく、日本の登山家が定めた高い水準をすら越えた方であると、両親に教えて彼らを感服しなかったことを認めます。こういう訳で、私と私の両親との間に平安を創り出してくださったことに對して、私は桑原教授にお礼を申しあげることができませんので、少なくともこの場で、皆さんに私の気持ちを理解して頂きたいのです。

物事を四〇年後に振り返ることは、高い山の頂上から景色を見ることに似ています。細部はぼんやりとしているのに対し、全体的な印象は一層はつきりとしみます。太陽、雪、暑さ、寒さ、風、酸素の欠乏などの思い出しは色褪せ、苦悶、友情、美の記憶は逆に残ります。登山の経験のそれぞれの要素、それは困難と危険が増すほどこれに比例して強度が大きくなります。登山家なら誰でもこのことがわかります。

しかし、そのことを他人に充分満足できるほど説明することができた登山家はいませんし、将来も出てこないでしょう。経験のうちのある部分は説明できても知れませんが、挑戦、美、恐怖、歓喜などです。これらのものは他人が理解することができません。しかし、これらの感覚が混ざり合っている全体としての感情は、経験されなければなりません。書物、フィルム、またはコンピュータ上のヴァーチャル・リアリティ（仮想現実）によって、それは暗示する事はできても、再現することはできません。もしあなたがほんとうに知ろうとすれば、ほんとうに実行しなければなりません。

その上に、登山というスポーツの歴史においては同一の感情が二つあったことはないし、将来にもないでしょう。それぞれの登山者は自分自身の背景と展望を自分の経験に引きつけるので、二つの経験が似通ったものになるといふこともあり得ません。このことがこんなにも複雑だという理由は、山岳が大きな、無生物的な物体であるからです。それは実際のところ何なのかといえば、それは私たちの魂の鏡であります。私たちの魂はたいへん複雑なので、どんな文化・宗教の賢者たちも、幾千年の間この魂をはっきりと説明することができなかったで、山々から反射されて私たちの目に入る像も同様に入り組んだものでした。それは人が異なることで変わるだけではなく、個人と山との関係においても変化します。山を見上げている旅行者がもつ理解の本質は、山の斜面に立っている登山者のそれとは異なります。努力が認識に影響を与えます。山頂からの同じ景色は、そこまで登っていった人と、ヘリコプターに乗ってそこへ降り立った人とは異なります。ジョージ・リー・マロリーが「苦闘をして理解する、それが法則なのだ」といった通りです。

しかし、山岳は私たちの魂の複雑さを反映するのに対して、それはまたある種の共通する感情を与える傾向があります。人々は常に山を見上げなければならなかったから、私たちに美と畏怖の念を呼び覚

ました。その故にこそ、中国の五岳（五聖山）とか日本の富士山のように、多くの文化において山岳は神聖なものと思われ、そこに登ることは崇高なるものに相応しい敬意の表現となるのです。私の友人サミュエル・シルヴァースタイン博士は「神はシナイ山の頂上でモーゼに会ったのであり、ベースキャンプで会ったのではなかったことは、意味深い」といいました。

私がいざしば思うことは、他の人たちが私の登山に対して異なる反応を示すことです。一九五五年にダラス・ロータリー・クラブの定例の「父と息子」午餐会において、登山についての一般的な講演をしたことがあります。終わってから、ある人が近づいてきて、「少し質問をしたいのですが」と丁寧にいきました。「どうぞ」と私がいうと、彼は「そのことであなたはお金をもうけましたか」と尋ねます。「いいえ」と答えると、「そのことであなたはなにか名誉を受けましたか」と尋ねます。私が再び「いいえ」と答えると、彼は首を振って、「いいえ」「あなたはきつと頭がおかしいのにちがいない」この紳士の質問と見解はアメリカ人の登山に対する態度を簡潔、正確に要約したものです。お金も名誉も貰わないということは意味がないのと等しいのです。今日ですら、アメリカでは登山者が数十万人まで増え、目先の利く雑誌が登山を奨励し、山の書物がベストセラーの仲間入りをするようになって、一般の国民は挑戦という象徴を理解するのが関の山です。

バルティ族のポータたちも登山を理解していませんでした。一九五八年に私たちがバルトロ氷河を登っていた時、バキスタン大隊員リズヴィ大尉は「バルティたちは、この隊員たちは皆神を探してカラコルムに入っていくのだと思っているのです」と、私に語ってくれました。この隊員たちがなぜ心地よい生活を離れ、山の中で困難や死に直面しようとしているのか、その理由はこのようにしか理解できなかったのです。私たちがなぜ山に登るのか、テキサス

州の友人たちもポータたちも本当には理解しなかったのですが、真実により近かったのはバルティたちでした。

外国人が他の文化を観察するのは常に危険なことです。平均的な日本人は平均的なアメリカ人またはバルティ人より登山を良く理解できると、私は信じます。日本の文化は、美と聖に対する敬意と物質的世界の挑戦と要求に対抗する能力とを結びつけることができました。あなた方の最初の詩集、八世紀の万葉集では、山岳はしばしば自然美を代表するものとしてとらえられています。山部赤人は「不盡山を望める歌一首并に短歌」で次のように詠います。

天地の分れし時ゆ 神さびて高く貴き
駿河なる布土の高嶺を

天の原ふり放け見れば渡る日の影も隠らひ

照る月の光も見えず 白雲もい行きはばかり

時じくそ雪は降りける

語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ 不盡の高嶺は

返歌 田子の浦ゆ うち出でて見れば真白にぞ

不盡の高嶺に 雪はふりける

一二世紀の後に、日本の高度技術社会の象徴は依然として富士山であり、その美しさは日本の精神を代表します。ある意味では、日本の複雑な文化は登山経験の複雑さに似ています。登山の目標は山頂であって単純ではありませんが、活動とそれに対する報酬は単純ではありません。しかし、山岳自体の複雑さと同様登山の複雑さの中に、共通した主題があります。歴史も文化も異なる異なった国々から来た登山家たちは、登山という文脈の中ではお互いに理解しあいます。

チヨゴリザ遠征隊とヒドンピーク遠征隊は、対照的な歴史と文化をもつ二つの異なった国からやって来ました。一方は何千年の歴史をもつ古い国であるのに、他方は二〇〇年の歴史しかない若い国です。

一方の文化は集団を強調し、他方は個人を強調します。一方は統合に向かう傾向があり、他方は多様化に向かいます。しかし、このような背景とは無関係に、チヨゴリザとヒドンピックの如き高峰が、そこに登ろうとし、その秘密を体得しようとする人に要求する資質は不変のものであり、つまり、忍耐、決意、勇気、判断力、ティームワーク、とりわけ山という存在を前にして抱く謙虚な気持ちであります。ヒマラヤにおいて、成功と失敗を分ける線は紙一重であり、後になってから初めてはつきりと見えるのです。失敗したり死んだりした人々も、なにか間違ったことをしたのではない。そうは言っても、成功するためには人は前進しなければならぬ。堪え忍ぶことをしない人は頂上に到達できないでしょう。しかし、謙虚さをもたない人は山から戻って来ることはいけません。

下界においては私たちには相違がありますが、山においては私たちは同じであります。下界において私たちは相違に気づいていますが、山では私たちは類似点に気がつきます。高い山は、私たちに山岳に敬意をもつこととともに、仲間の登山者に敬意をもつことを、教えてくれます。

あの偉大なイタリア人登山家ガイド・レイがいったように、「私たちが山に入るのには生きるためであって、死ぬためではない。」この短い言明は定義することを許しませんが、登山経験の本質を要約しています。これはまた、方法や装備が変わっても、なぜ経験はいつまでも似通っているのかを、説明しています。山々がどんどん探検され、登頂されるにつれて、未知が消え去っていくことは本当です。しかし、同時に変わらないものとして、不確実性または危険の程度があります。登山家が進歩した技術を用いるのは成果を高めるためであって、安全を高めるためではありません。初期の先駆者たちはウールの衣服を身につけ、氷壁にステップを切りました。現代の登山者はナイロンのロープ、プラスチックの山

靴、アイスクリュー、一二本爪クランポン、アイスハンマーで身を固め、垂直に近い氷壁を真上に登って行きます。この両者の間には似通ったところはほとんどないように見えますが、実際には彼らは似ているのです。今日の登山家は、一〇〇年前、五〇年前とはいわぬにしても、ほんの二、三代前かれらに先行していた私たちの世代をびっくり仰天させることをやりますから、達成したことが似ているのではなく、挑戦することが似ているのです。外側の見かけは幾光年も離れているが、内面の真実、とりわけ、不確実性のレベルは相近いのです。先駆者が直面した同じ大きな危険に、現代の極限的登山家は直面しています。今日ではたやすい登攀とみなされるところで先駆者たちは殺されました。私たちが四〇年前にやったこと、登ったルートを、現代の服装で、現代の装備で登るならば、一步後退したことになるでしょう。人間の本性は絶えず前進することです。実際のところ、登山成果の水準が上昇したことは技術と知識の進歩を導き出したばかりではなく、未知の、不確実性の程度を下げることをも結果しました。平衡というものは存在しなくて、静止することは後退することなのです。私たちが年をとったものが若い世代についてどのように考えようと、彼らが後退しないことは確かであります。

しかし、私が先ほど述べたように、山の経験は複雑であります。それは単なる衝動的突進ではありません。登山は、交通量の激しい街路を車のライトを無視して横断する行為を、垂直に変えただけのものではありませぬ。危険をともなう他の活動から登山を区別するもの、それは山岳の美であります。山岳の大きさ、形、岩と氷の組み合わせなど、人が山岳を神聖と見なすのに貢献するこれらの様相そのものが、登山を他の危険な活動やスポーツとは違う、それらを越えるものにしていきます。人はもはや山の最高度の挑戦には耐えられなくなつたときですら、もつと控えぬやり方で山に入ることができ、山に入ることによって得られるあの感動と恩恵とを得ること

とができます。山々はまことに自然の大聖堂なので

山岳が私たちに何を与えてくれるかを良く知っているものは、危険があるうがあるまいが、そこに行くでしょう。有名なフランス人登山者ガストン・レビュファはある朝早くアルプスの非常に困難な登攀に向かう途中、仲間に関いかけてました。彼らがこの登攀を成し遂げることが誰にも知られないとしても、登るであろうかと？ レビュファの結論は、誰かがそのことを知ろうと知るまいと、それでも登るというものでした。ここにいらっしやるとなつてもさうするでしょう、私は確信します。私たちがみな人間ですから、ちよつとした表彰を受けることに反対はしませんが、山へ行く理由は人に認められるためではありません。山へ入るのは生きるためなのです。

ヒマラヤほど生きることが厳しいところは他にありません。あらゆるものが大きいのです。規模、危険、必要な時間と努力、雪崩、嵐など。アルプスではあなたがたは試練を受けます。ヒマラヤではあなたがたはそれの中で生きるのです。神聖な山は他にもあるでしょう。しかし古代ヒンドウーのプラナーナの中で、「露が朝の太陽で消えていくように、人類の罪はヒマラヤの栄光によって吸収される」といわれたのは、ヒマラヤだけではありません。登山家はヒマラヤにおいては純化されるのではなくて、浄化されるのです。人は外側の飾り板をはぎ取られ、内部の本性を露にされます。私たちは、自分自身を見ることを好む人もあり好まない人もありますが、見ることを避けることはできないのです。私たちは学ぶほかに法はないのです。しかし、学ぶことは友情を生み出します。友情は同心円の外側へ広がります。核心部には私の遠征隊員たち、次にはガッツシャーブルム四峰のイタリア隊やチヨゴリザ隊など、似通つた時と所で経験を分かち合つた他の登山者たち、その外側の同心円にはヒマラヤで登山をした人々、最後に一番大きい友情の輪、すなわちすべての登山者たちです。妻と私はクリスマスと新年に約五〇〇枚

のカードを書きます。家族、親類、友人たちに送るのですが、とりわけ登山者たちを送ります。登山者の多くはほんの短期間会っただけかも知れないのですが、山岳の結びつきはたいへん強く、文通を続けたいと思っています。私の家族以外では、誰よりも登山者に親密感を抱いているのです。山に入ろうとする欲望に似て、それは感知することはできないように見えますが、それはそこにあるのです。

あの遠い昔、カラコルムでなした努力の何が今もって続く利益をもたらしてくれたのでしょうか。あの苦闘の記憶、景観の美、達成感、今なお楽しいものです。私は常に山岳を良いものと考えてきました。しかし、四〇年後の今私が真に評価しているのは、人間です。つまり、仲間の遠征隊員たち、および他の登山者たちとの間に生まれた多くの友情です。山岳は重要でありますが、人間はもっと重要であります。その故に、私はこの場にお招きを受け、チョゴリザ遠征隊の輝かしい成果に対して賞賛の言葉を述べることと、この長い年月の間の彼らの友情およびたいへん多くの日本の登山者たちの友情をどれほど評価しているかをお伝えすることができ、非常に感謝しています。あなたがたの成功をお祝いし、そして、友情にお礼を申しあげます。

どうか、もつといつまでも山に行くことができ、富士山に登る巡礼者の姿勢をもって山々に近づくことができまうように。私たちの五感がときまされ、山の天気は晴れ渡りますように。どうもありがとうございます。(酒井敏明 訳)

第二部 パネル討論会

司会 斎藤清明(AACK会員)

四人の方は、錚々たるキャリアの方々ですが、本日は「海外登山のあり方」というテーマでお話を伺

い、議論をしたいと思えます。メンバーの皆様は大学山岳部のOBでして、私も京都大学土山岳会というOB会のような組織に属していますのですが、このように大学関係者だけで海外登山を討議することは、ちょっと一面的かも知れないと思えます。しかし、少なくとも日本からの海外登山において、大学山岳部OBの人達が活躍したことは事実であります。ですから、それぞれの立場からの本日の発言は、傾聴に値するものと存じます。では、藤平さんどうぞ。尚、藤平さんは、来年八月に富士山に於いて開催されます世界野生生物映像フェスティバルの会長をされていて、環境保護問題に取り組んでおられます。

パネリスト 藤平正夫氏

(元日本山岳会会長・チョゴリザ初登頂者)

今御紹介されましたように、最近は山そのものには登れなくなりました。実は足を怪我致しまして身体障害者となっておりまして。そんなことから野生生物の映像を世界から募集しての、一年置きのコングールを富士山で開き、最優秀賞を決めると言う仕事をしています。フェスティバルは四日間となります。世界から四〇〇本位、四〇カ国位の参加となります。大変な行事であります。それは扱置き、山の話にいらせていただきます。

先程のクリンチさんの講演は、素晴らしい山登りの本質をついたお話でありました。非常に感動しました。いま思い起こしますと、チョゴリザの頂上に登ってきて下山した翌朝、目を覚ましてチョゴリザを眺めると、私達の登った見苦しい足跡がありました。一瞬、いかにも心無いことをしたなあと、純白な雪面を汚したなあと、後悔したとの気持ち、ひとつのセンチメンタリズムかと思えますが、山に登るときは、飽くまでもそんな気持ちを持ち続けてい

るつもりであります。

高い山をどうするかは大変難しいテーマです。現在の人は、先端装備と技術を持っていて何等苦勞する必要が無くなって参りました。当時の私は、よくもまあ凍え死にしなければと思うわけでありまして。この進歩発展の反面、山岳組織の崩壊と言うピンチを迎えるに至りました。例えば、日本山岳会があります。かつての日本山岳会であれば、ヒマラヤ登山は出来なかつたという時代では無くなつたのであります。今日では、数人又は一人でも高山へ出掛けられます。難しいルートもやれる時代になっています。登山というものが、容易に取り仕切れるようになってきました。中心を失って、拡散してしまつたという事でしょうか。要するに日本山岳会はどこを向いているのか分からなくなつてしまつたのであります。

私が会長のとき考えましたのは、各大学の山岳部員たる青年部を強化しよう、力を付けパワーを持続することが大事であると考えました。同時に世界の山岳情報の収集が出来ないか。日本の登山界の歴史の流れからも、日本山岳会という組織がそれをやるに適當ではないか。つまり情報センターを考えようと思ひました。私自身は銀行員としての職業と家族に対する責任感がありまして、心弱い人間かも知れませんが、特化して突っ込み切れませんでした。現在の尖鋭的な活動を為さっているスパークライマーの方々のために、彼等の集いと、交友関係のもてる場としての山岳会にしたいと考えました。この線に添った情報センターの考えは、実際にプログラムを作つて個々のデータを集積するのは、大変な作業で一〇年くらいかかると言われました。これはそのままになって終いましたが、薄い月報「山」の発行で補っているつもりであります。

次に対象の山をどの様に考えるか。アカデミック・アルパインクラブ、京都大学土山岳会、バイオニアワークが特徴であります。既に高い山がな

くなってきた現在、考え方としては、長大尾根をやる方向も一つの考え方であります。例えば日大のチヨモランマ東稜、或いは日本山岳会のマカルー東稜の如しであります。一人一人がスパークライマーである必要がありますが、これを組織するには山岳会の力を借りなければならぬということが残っている。これが一つの方向であります。それから飽くまでも処女地を固守すると言う立場もある。かつて京都大学土山岳会の中では、垂直派と水平派というのがあった。今西寿雄・私などは垂直派の推進者だったが、実際的には崩壊しつつあると。水平派に戻ると言うような選択に変わるのではありません。チベット山岳会が、かつて本気になって秘境地を捜していたことがあります。我々も未知の分野は大歓迎でありまして、未だ山は沢山あると話しをしていたことがあります。

これからは、いろんな方向に新しい可能性を見出すことが、登山界の道だと思ふ次第です。

パネリスト 平林克敏氏

(同志社大学山岳会・アピ・サイバル初登頂者)

四〇周年おめでとう御座います。

京都大学の四〇年について、チヨゴリザ以後の活動を横から見ていると、初登攀を中心とし一歩も横に外れていないのでありまして、非常に真摯な道を歩んでおられ今日にいたっていると思うわけであります。

実は私も同様でして、一九七〇年のドウラギリを別にしまして、初登攀を求めてやってきました。しかも僻遠の地に登る山が良いと言う思想で、初登攀を考え、生き方を求めてきました。この初登攀の経験は、その人、或いはその人の属する団体の中で、自信とか、誇りとかいう非常に深いものが、自分の中に培われてきました。私は一九六〇年にアピの登

頂をやりましたが、その喜び、達成感、計画を実施していく過程における経験は、私の中に大きなウエイトを占め、今日に至っています。これが企業に於いて、研究開発に於いて事業開発の中でも強い支えになっており、ある時は壁にぶち当たり、思案に苦しむ時、いつでもそのことを思い出します。山の初登攀は、人生の通過点にすぎませんし、大きな流れ文化の形から見ても、地球上の出来事の点でしかすぎません。しかし、それに参画した人にとっては、高い精神性・体験が大変重要なものとなっております。さらには、社会に於けるあらゆる行為、仕事、研究、事業開発、教育等に於いて、この高い精神性は生かされるのであります。社会に対し新しい創出、貢献に対し重要な役目を担うこととなります。京大の歩んできた道が、ひとえにそれであると言えましよう。従ってそういう精神から出て来た今日の輝かしい実績が、今の京都大学の歴史を作っているのです。山のみならず、全ての分野に生きているのです。ここにいる人々、亡くなった諸先輩の生きた道は、学術、教育、研究活動の面の全てにおいて生きており、リーダー的役割を為し、今日に至っています。高い精神性を有し、これを重要視すること、これらは初登攀から得られ、その活動の中から得られたものと思っています。

私はエベレストに日本として最初にやったとき参加しています。エベレストに登った時の自分の価値観は、アピ、サイバルに較べてみて、大きな価値を持つていないのであります。これは正直に申してあります。エベレストは既に先人が登っていますし、日本隊としても私は植村・松浦の後の第二登でありました。高さにおいては、社会的において一つの価値があるかも知れませんが、私の心の中では極めて低い山であります。それに較べてアピ・サイバルに登ったり考えたことの方が、計画、実行した過程の方が、大変ウエイトを占めています。

最近では、七〇〇メートル台の山が八ヶ九山を残して全部登り尽くされてしまいました。丁度チヨゴ

リザに登ったときは、一八五二年にエベレストの高さが確認されまして、その時から一〇〇年位になり、更に一九〇七年ロングスタッフがトリックスル一峰に登りますが、七・三〇メートル程の山ですが、登ってから丁度五〇年になるわけです。なんと戦後の一九五〇年から、五八年のチヨゴリザ、私の登った六〇年の間に、ヒマラヤ山脈の高峰全てのごとくが登り尽くされてしまいました。八〇〇メートルで登っていない山は無くなってしまったのであります。今日までのほんのわずかな時間においてであります。カラコラム、コンロン、天山に於いても然りであります。これからの人達は、初登攀を求めること自身が許されなくなったのであります。壁、稜線、水壁を求めるのは、そういうスタイルになるのは当然なんです。と同時に、過程が省略され、結果だけを求めると言うのが今の社会かと思うのですが、山でも同様であります。一番重要視しているアプロチが簡略化されております。町の運動具屋さんで装備を買えば、南極でもヒマラヤへでも何処へでも耐えられる装備が売っています。簡単に手に入る自動車を使って、或いはヘリコプターで出掛け、容易に頂上を求めることが出来るという具合になっていきます。山の情報についても、どうしたら高所順応が出来るのかとか、どのルートを考えれば良いのか等、有り余る情報があります。こんな状態で登ることを考える人にとつては、不幸な時代であるといえます。しかし、若い人は多様性に富んでおり、そしていろんな模索をして登山を考えるだろうと思えます。が、本質的には大きく変わらないだろうと思えます。つまり、日本の山、欧州アルプスで行われたことが、ヒマラヤ山脈でも行われるし、南米でもアメリカ大陸の山々でも、その様に変化していくだろう。だが、変化というものは、非常に多様性に富むものでして、もしかしたらエベレスト頂上に停泊し、何日間居たとかという、そんなことが起こりやせんかとおもいます。アプロチから頂上に至るといふ垂直の考え方で来たものが、今や壁をやる、山頂にて停泊する、

氷壁だけを楽しむとかいう、いろんなものが出てくるのではないか。既に出てきているのがフリークライミングがあり、横行しているのがあります。

そういう時に、日本山岳会とか、山岳協会とか、或いはAACKとか、リーダー的役割を果たさなければならぬ団体がある、こういう指標というものを示すが、大事であります。また、重要な時期に入っていると思われまます。そういう意味で、若い人は企業の中から見ても、山へ行く若者を見ていても、非常にいい素質を持っており期待されますので、我々のこれからの指導なり示唆というものが大変重要なウエイトをもっていると思っております。

パネリスト 井上達男氏

(神戸大学山岳会・シェルピカソリ初登頂者)

私が丁度一〇歳の時に、この右に写真がありますチヨゴリザが登頂されました。非常に幸いなことに大学に入って平井先生にお会いしました。AACKでは私の恩師をボコさんと呼んでいるようでケシカソリと思っているのですが、とにかく遠征というものに直に接する事ができました。一九六八年にアラスカにまいりました。当時ヒマラヤに入れなかったためですが、そこでトレーニングを行いました。神戸大の場合、平井先生の来られた時と、それ以前と随分違っていました。大きく方向が変わったのであります。平井先生以前は、アメリカ路線でして、南米パタゴニアから始まり、北上してアラスカをやりまして、北米が終わって次いでヒマラヤということで、一九七六年シェルピカソリになったわけです。それすら一〇年後にクーラカンソリを登って、一つのピークを迎えたのであります。それからほぼ一〇年経って、今日のテーマの如く、これからどうするかと、非常に大事な時期になっております。

当時、我々の世代は、強烈な素晴らしい楽しい目

標を与えられました。それは初登頂でした。今はそれとは違った思いを持っています。当時、頂上に登れなかった者は次の機会にという考え方でしたが、なかには次の機会に登った人もいますが、登れない人が多かった。ほぼ処女峰が無くなった現在では、次の世代にどういふ夢を与えるか。今までは組織としての夢、或いは個人の夢を実現するということでした。これからは個人・個が重要視され、それをサポートする側面があるのではと思っております。頂上だけを指すだけでなく、プラスαが付いてくると思うのです。それは日本の山でも同様でして、例えば山にいつてスケッチをしてくるとか、沢山あるわけですが、このプラスαはヒマラヤに、あってもいいのではないかと、しかるべきであると思っております。少し楽しみものも出来るようになってきております。科学技術の進歩が著しいのですが、丁度今宇宙を飛んでいます向井さんのように、技術陣がナサにあって、これを支えているのであります。かかる技術を駆使することにより、我々にも出来るような登山、山岳部員の少ない時代の小人数の山、費用が掛からないライトエクスペディション、ヴァリエーションルート等、手軽にチャンスが有るかと思えます。時代と共に変わっているのです。コンピュータ技術が発達してきております。インターネットのニュースで見ましたが、今年五月のエベレストのアメリカ隊はGPSを山頂に四日間置き、回収し、持ち帰っております。それにセルラホンですが、御承知の通り、携帯電話、自分も持っています、トランシーバー等、通信技術が簡単に手に入るのです。おそろく遠征の形が、違ったものになるでしょう。従来の延長でなく、最新技術を使っているのです。

それだけに今、新しいスタイルとか、モラルを確立しておけば、より良い、安全な、幅の広い遠征が得られるものと思われまます。例えば年をとって来れば、ヒマラヤの頂上に登れなくなりまます、中には六〇歳でも登る人は居まます、さらにはBCですら

行けなくなるのであります。そこで通信技術により、日本にいても若い人の登りをリアルタイムに、時にアドバイスしたりして、バーチャルに遠征を楽しむ時代が来ると思われます。もちろん先端には若い人がいて登るわけですが、一般人はリアルに体験できる、この様な形を求めていくのが次の世代かと考えています。

もう少しGPSについて申しますと、我々はシェルピカソリの時、地図すら無く、技術者だったものから、測量機を持って行き地図を作りました。これは今でも手許に持っています、今GPSを持っていつて正確な地図を再び作るというような、新しく非常に深く山を楽しむ一つの方法があるかと、いま一度やりたいものだと思います。既にアメリカ隊のそういうGPSを使ったグループがあり、受信したデータをソサティに任せ正確な地図を作っていて楽しみにされているところがあります。

この四〇年間を考えますと、先般、平井先生から当時のトランスシーバーを捜せと命題を戴いていますが、なかなか手に入らないのですが、その時代と較べて現代の科学技術の進歩、装備の進歩をみると、これからも、それらは良くなると思われまます。それとの調和したかたちで取り入れながらの新しい世代の人達の動きにより、遠征を楽しんでいく、そこへ過去の経験を伝えてやりたいものだと、念願をしています。

司会 斎藤

通信の問題ですが、イリジウムというものが出来てままして、今では世界中の山から、何処からでも、南極からでも通信ができるようになってまます。このような通信を使えばどのような山登りができるか興味尽きないところでは、では次に松沢さん、どうぞ。

(AACR会員・シシャパンマ登頂者)

チヨゴリザ登頂四〇周年ということで記念講演に参加できますことを、私自身は大変誇りに思っていますし、関係者の皆様に心からおめでとくと申しあげます。

与えられた題の中で全うしたいと考えますが、自分のアイデンティティとしてチンパンジーの研究者として、人間がどうしてこの様にものを考え、どうして心の動きをするようになったか、心の進化の歴史を考えることに、自分の持っている時間の全てを使おうとしています。残り時間を考えても自分の終生の仕事として、ひとえに霊長類の研究にかかろうと思っと思っています。そういう立場からは、山を語るというのは、何か面映い感じがします。本来ここにくるべきでなく、ここに座るべき人は、生きていれば同期の高木であります。K12に登り、そして帰らなかった高木であります。また、広い意味でのアカデミックとアルパインを繋げるという意味からは、一回生下の松林公蔵君が適当かと考えます。今回、非常に尊敬する平井先生、ポコさんから、お前やれと言われましたので引き受けてしまいました。自分なりの考えを述べたいと存じます。

私は一九五〇年、昭和二五年の生まれであります。この年は、山好きの人ならバツと閃めかれると思いますが、アンナプルナ人類初の八〇〇〇メートル峰登頂がありました。生まれたときに八〇〇〇メートル峰が登られてしまった。言わば自分の人生のスタートする時点で既に、八〇〇〇メートルが登られており、その時点から自分はスタートをしなくてはなりません。後から来たものの悲哀といましようか、こんな感じをもっていたわけです。

もう一つアンナプルナについて語れば、とても印象的に思っていることがあります。それは一九七〇年、私が二〇歳のときですが、当時京大山岳部の学

生だったのですが、槍ヶ岳のアイゼン合宿から帰ってきた秋でした。一般的には多くの人は一九七〇年と言えは、三島由紀夫の割腹自殺の年として記憶されていましょう。私は個人的には、アンナプルナ隊の隊長であったモーリス・エルゾークさんとお会いできたことであります。とても強く印象に残っています。エルゾーク氏は日仏会館で講演をなさったのですが、参加者は決して多くなく、三〇〇四〇人位だったでしょうか、とにかくお話を聞きました。話はフランス語でして、通訳が無かったが、全然チンパンカンで分かったのですが、当時二回生でフランス語を習っていたとは言え、よくは分からなかったであります。只一つ非常に印象強かったのは、「なんで山に登るのか、山登りとは何か」と言うことに対し、「山は小さなユニバーズである。小宇宙である」と。人生において大事なことは、信頼するとか、友情を持つとか、共感する、夢見る、また夢見ることに努力するということである。人が人生において学んだり、悩んだりすること、時間との経過で体験したことが、登山の世界の中で完結したものとしてみられるのである。これと同じ様に平井さん達のチヨゴリザも小宇宙であると言えるわけですね。

五八年のチヨゴリザは京都大学学士山岳会の一歩輝いた時で、客観的にみても、誇り得る数年が続きました。六〇年のノシヤック、さらには一九六二年インドラサン、サルトロカンリ、一九六四年ガネット・アンナプルナ南峰と、立て続けに処女峰をやり、京大らしい山登りをやりました。それと共に隊にかかわった人が、エルゾークのいうユニバーズを共有したということでもあります。

今夏、アンナプルナ・チヨゴリザ会がありました。ここにおられる中島さん、平井さん、岩坪さん、斎藤さん等の当時の隊員が集まる会ですが、初めて出席させていただきました。藤平さんには初めてお目に掛かりました。お名前は前から存じていたのですが、皆様が犬山にお越しいただき、チンパンジ

ー研究を見て戴きました。桑原先生の奥様とか、加藤泰安の奥様とかも御一緒でした。四〇年前の昔のほんのちよつとした時期の事なのですが、四〇年という時間を越え、各人がこうして四〇年間も結び付くことが出来るということに、感銘をうけました。人生において、他にもこの種のことを経験できるかという、そうはいきません。やっぱりヒマラヤ登山ならではないでしょうか。山ではないかと思うわけです。

その後の一九七三年の西堀総隊長のヤルンカンに高木と共に参加いたしました。残念ながら、ヤルンカンの遠征以上にその七三年、七四年は、六〇年代の輝かしさと違って、ものごとが安定化する時代でして、本当に短い間にヤルンカンに登頂し、そして遭難があり、K12で登頂し、遭難がありと、同時に国内でも遭難が相次ぎ、北又で亡くなり、或いは槍ヶ岳で五人も亡くなるという悲しい時でした。自分自身が、沢山の仲間を山で失ったのですが、一生めけてもいい位だったのです。

ところが、縁がありました。八四年に日本山岳会のカンチェンジュンガ縦走隊に参加致しました。このときの動機は、樋口さんというガネットシユ隊長及びヤルンカン登攀隊長であった人で、前年にガンでなくなられたのですが、この方の存在であります。病院にお見舞いに行、枕頭に立った時、実に、にこやかとして、ベットにおられました。最後まで笑顔を絶やさなかつた人であります。このときの私は、七三年のヤルンカンから一〇年ほど山から遠ざかつており、一応はチンパンジー研究者としてまっとうに歩いていたのですが、この様ににこやかにするガン患者がおられる事に深く感動致しました。自分が今日あるのは樋口さんのお陰で、ヤルンカンでとてもいい思い出を戴きました。当時高木と共に四回生の学生でヒヨッコでして、ヤルンカンへは実力もないのに参加させてもらったのは、若いものに良い夢をみせてやろうとのお気持ち先輩方にあつたように思うのであります。それを申しあげたかったことと、

有名な山としては、京大と関係の深い梅里雪山位なものです。それ以外はほとんど知られていません。行くたびに新しい発見があり、それを求めて未だに足を運んでいます。そういう意味でヒマラヤの八〇〇メートル、七〇〇メートルは登り尽くされて、情報も有り余る程あるわけで、大きい山ではそうでしょうが、まだ水平に広く見渡しますと、世界にはまだまだそれなりに、新しい発見が得られる場所があるのではないだろうか、思うわけです。これからの海外登山は行き詰まっていると言う見方でなく、やはり広く知られていない世界を捜し求めていけば、自分の山が見付かってくるのではないかと、私はそういう思いで、あっちこっちをうろろろしています。例えばアメリカンジャーナルとか、アルパインジャーナルを通じて外国の人々の活躍を見えますと、案外広く、日本人の行かないところとか、目を向けていない地域に行っています。極地であったり、半島であったり、素晴らしい所が沢山残っている。ロシアにしましても、ソ連の崩壊でウズベキスタンとか新興国などがあり、この方面は不勉強ではあります、ジャーナルを読みますとそういうところで活動を展開している。こう言う動きで、横の広がりで、世界の楽しい知られていないところをやっている。小さいパイオニアワークかもしれないが、これからの方向があるのではないかとの見方をしています。

その他場内発言（要旨のみ）

宮川清明氏（京都山岳会）

今秋、ミニヤコンガへアルパインスタイルで、一週間の予定で出かけたが、悪天候で登頂出来なかった。五七才であるが、装備に工夫をこらし、より困難に挑む気持ちをつなげて、いくつになっても新しいチャレンジを行いたい。

遠藤京子氏（ヒマラヤ・グリーン・クラブ）

カラコルムの樹木減少（燃料化）の惨状を救うため、植林などを行っている。これからの登山においては、現地環境問題を重視する必要がある。応援をお願いしたい。

締め括りとして

藤平正夫氏

大変いろいろな御意見を伺いまして、また、場内からのいろいろの新しい提議もあつたと思います。左様なほどに、登山は多角化しつつあります。登山は多角化する要素をはらみつゝあるとも言えます。今これを無理して纏める必要はないでしょう。その中から新しい一つのスタイルが生まれてくると思っています。

やはり基本は山を大切にしよう、山を愛しようということ。また、山を取り囲む自然とか、そこに住む住民、ネパール、パキスタン等との繋がりを無視できない。これを度外視しては登山は有り得ない。と言っても、登山に全てを包括するという山岳会はない。むしろ日本山岳会なり、団体、地域山岳会なりが、知恵を絞って、分担しながら進めていくというのが一つの方向ではないか。

第三部 ビデオ上映

「花嫁の峰チヨゴリザ」

閉会の挨拶

AACK副会長 田中二郎

四〇年前の素晴らしいチヨゴリザ登頂の映画を見ましたのは、翌年封切りでしたから、本日は三十九年に拝見させてもらいました。登頂された時は、私は高校三年生の夏で、受験勉強らしきことをやっていた。チヨゴリザの映画を見て、いよいよ京大に入るべしと受験勉強に拍車がかかりました。実はその前に、三年前にカラコラムへ木原先生を始め今西、梅棹、川喜田というそうそうたる先輩が行っておられまして、学術映画「カラコラム」がありました。高校から団体鑑賞で見に行っております。山登りといい、学術探検といい、とにかく京大へ、山岳部へ入りたいたい志したのでした。そこへチヨゴリザ映画ですから、まさしくダメ押しでして、新たに感慨を深くしたわけでありました。

チヨゴリザはAACKの歴史のエポックでした。そしてその後のヒマラヤへと脈々として流れていったわけでありました。

実は全国的な傾向として、大学山岳部は衰退傾向にあります。現在京大山岳部では、各学年二名程度でホソボソと続いている現状です。我々のヒマラヤへの出発点は笹が峰の京大ヒュッテであります。ここで一年を通じて山に親しみヒマラヤへの道のスタートを切ったわけでありました。現在は山岳部長をやっていますが、山岳部管理のこのヒュッテは、桑原、今西、高橋健二等の諸先輩が昭和の初期、七〇数年前に建てたものですが、今や倒れ掛かっています。来年中には建て直したいと考えています。諸先輩には物心両面にわたってサポートしていただきたく存じております。

本日の講演者、パネリスト、発言の方々には厚く御礼申し上げます。また、本日は快晴でして建物の中にいるよりは外の方が宜しいかと言うのに、京大会館にお出で戴き厚く御礼申し上げます。この様に大盛会であったこと、有難く感謝申し上げます。

ワルター・ボナツティ夫妻

歓迎会

(解説)

一九五八年の伊・ガツシャープルムIV隊の初登頂者。四十年前、F・マライーニ氏と共に我がチヨゴリザ遠征隊のBCに来訪。そのとき桑原隊長よりヘルマンブルの遺品をボナツティ氏に託された経緯あり。ロツサナ・ポデスタ夫人は「トロイのヘレン」主演女優。この度日本山岳会の招待で来日。九月二十五日、大阪で講演会（日本山岳会関西支部主催）の後、来洛。

九月二十六日午後、京都市。会員谷泰の通訳案内で清水寺と庭園の特別拝観。夜は歓迎夕食会（日本山岳会京都支部、AACK共催。於ホテル京阪京都）。

酒井支部長及び上尾会長の歓迎挨拶、会員原田道雄によるAACKインターネットによる登山史の紹介及びチヨゴリザ映像の披露、会員平井一正のバルトロ水河再訪のスライドにて自然とその地域の社会的な変化を紹介。内田副支部長より夫人へバラの花束贈呈。

参会者：チヨゴリザ隊藤平正夫、山口克ほかAACK二十名、支部会員十名、同志社大学山岳会会長吉村公一夫妻。

九月二十七日、谷氏と会員阪本公一夫妻が鞍馬山はじめ金閣寺など案内。夕刻阪本宅で京大山岳部員がボナツティ氏にインタビューする一駒あり。夜の宴はAACK主催で、木屋町ガンコ園二条で開かる。元会長近藤良夫はじめ十五名参加。チヨゴリザ遠征当時の思い出など気楽に語り合った。平井隊員が当時のバルトロ水河で、伊ガツシャープルムIV隊が帰路捨てたものを保持していて、持

参のビニール袋からジンメン谷産出の肉缶詰（直径十五センチメートル）をやおら取り出し披露した。さすが博物館と、一座は沸き立った。一九五八年製と刻された缶詰は膨脹しており、爆発しそうな円形地雷に見え、ポデスタ夫人は恐れをなしたようだった。さすがの谷氏も次々に突拍子もない話が出るものだから、日本人にイタリア語で喋ったり、ボナツティ夫妻に日本語で話し掛けたり、大変だよと笑っていた。

翌日、京都駅に見送る。発車間際に「十一月八日、私の心は京都にある」と言いながら左右にザラザラの頬ずりを受けた。チヨゴリザ登頂四十周年記念講演会の事を思っていてくれるのであった。彼等の次の旅は南太平洋バヌアツとのことであつた。（高村奉樹記）

お知らせ

近藤良夫氏、二つの受賞

ランカスター賞（アメリカ品質協会）：品質管理の国際活動に対する努力と卓越した貢献に対し、五月に授与された。日本人としては初めての受賞。

ハリントン・石川賞（アジア・太平洋品質機構）：品質の方法論の発展に著しい貢献をした専門家、研究者として、九月にソウル特別市で受賞。

日本山岳会「秩父宮記念山岳賞」に
薬師義美氏

今年度創設され、AACK会長の推薦で応募していたところ、「ヒマラヤ文献目録の集大成」が評価されたもの。第一回めの受賞となる。十二月。

高村奉樹氏の受賞

長年に亘るアフリカの農業研究に対し、熱帯農学会より磯賞を授与さる。三月。

編集後記

- 夜の記念祝賀会は、高村奉樹の司会で、京都大学副学長三好郁朗氏及び日本山岳会副会長小倉茂暉氏の御挨拶を賜わり、元京大工学部山岳会会長近藤良夫の乾杯の音頭で開会した。百二十余名の参加があり盛大なパーティとなった。最後にチヨゴリザ隊員一同が、クリンチ氏と桑原隊長夫人を真中に壇上に立ち、満場の拍手をあげ、中島道郎の閉会の辞で幕となった。
- 時報13号（第三次梅里雪山合同隊一九九六の記録）が、お手元に届いた頃と思いますが、皆様方はどんな感想をお持ちになったでしょうか。「今後の海外登山のあり方」パネル討論が指針になっているかと存じます。
- 三、次号の原稿締切は二月十日です。（新井 浩）

編集委員 新井 浩、吹田啓一郎、竹田晋也

発行日 一九九八年二月二〇日

発行所 京都大学学芸部

京都大学工学部建築系

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一―八

(株)土倉事務所